

2025 年度 早稲田大学文学研究科 進学説明会 社会学コース オリエンテーション

参考資料

1. 2026 年度在籍教員の専門分野
2. 過去の修士論文題目一覧
3. 専門社会調査士資格について

大学院社会学コースのホームページ

<https://dpt-sociology.waseda.jp/courseinfo-g-2/>

問い合わせ: sociolab101@list.waseda.jp (池本・酒井)

1. 在籍教員の専門分野

*** 2026 年度研究指導募集の有無については、出願までに必ず 2026 年度入試要項にてご確認ください。**

池田祥英

専門はフランス社会学説史で、特に 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて活躍したガブリエル・タルドの社会学について研究している。これまでは「模倣」という概念に基づくタルドの社会学理論、およびその応用としての犯罪論やメディア論について、当時の歴史的背景を踏まえながら検討してきた。そのほか、同時代のフランスでタルドと論争を交え、一学問分野としての社会学を確立したエミール・デュルケーム、およびデュルケーム学派との関係や、現代の社会学理論との関係についても明らかにしていこうと考えている。

石田光規

現代社会の人間関係について多様な観点から検討している。具体的には、個人化していく社会における人びとの孤立、郊外および山村における地域のつながりの行く末、友人関係の経年変化などである。いずれの研究も、社会の変化が、私たちの「つながり」にどのような影響を与えるのか、を問題関心としている。近年は、私たちの居場所の問題、テクノロジーの進歩とつながりについての研究を進めている。

岡本智周

専門は教育社会学、共生社会学、歴史社会学、ナショナリズム研究、社会意識研究。研究の主軸は、① 国民国家論と② 共生社会論に据えている。①においては、世界をネーション単位で認識しようとする觀念自体を研究対象とし、現代社会におけるその生成・維持・変容に対して、学校教育をはじめとする人間の社会的行為がいかに関与しているのかを理解することを目的としている。②においては、ナショナリズム・エスニシティ、ジェンダー、身体、世代、階級・階層の相違をめぐる社会的葛藤・対立の分析と、社会的共生のための理路と資源の探索を行っている。

草柳千早

「相互作用としての社会」という方法的視点から社会問題、社会関係、自己、身体等の諸問題を研究する。その一環として、1) 個人的とされるさまざまな問題がよりマクロな社会問題へと媒介されていく過程の理論的・経験的研究、2) 間身体的な過程としての相互作用、人と人との「共在」の理論的・経験的分析等をすすめている。

嶋崎尚子

社会学の分類にしたがえば、家族社会学、ライフコース論、社会変動論、歴史社会学といえる。社会的分析次元間の連結を目指して理論的・方法的・実証的研究をしている。空間的には、マクローミクロの連結であり、時間的には、時代・コーホート間の比較である。

竹中均

広い意味での比較社会的なアプローチに関心がある。このアプローチ自体は広範な適用範囲を持つが、興味を持っているのは、比較社会的な視点から自閉症をめぐる問題を論じることは出来ないだろうかという点と、民藝と呼ばれる工芸文化をやはり比較社会的な視点で論じられないだろうかという点である。両者は全く別物に見えるが、どちらも、今ここにある社会のあり方を比較のパースペクティブの中で見直したいという趣旨では通底していると思われる。

田辺俊介

政治社会学、社会意識に関する経験的研究、社会調査方法論。特にナショナリズムや政治意識などの社会意識を主たる研究対象としている。方法論としては、主に量的社会調査によって得たデータの統計分析を用いているが、社会調査の方法論一般についても研究し、その方法面での理論化・精緻化を目指している。

樽本英樹

専門は国際社会学、社会学理論、政治社会学。現在興味を持っているのは、(1) 西欧、北米、東アジア諸国を対象とした比較移民政策論、(2) 国際移民をめぐる排外主義と過激主義の展開、(3) 日本における移民市民権政策の決定メカニズム、(4) 英国のナショナル・アイデンティティと移民の緊張関係である。以上のトピックを、理論と実証の往復およびマクロとミクロの規定関係に留意しつつ研究を行っている。一方、教育は移民・外国人に留まらないグローバル化に関する社会現象全般、およびヨーロッパ社会論を射程においている。

津田（木村）好美

専門は、社会階層論、老年学です。特に社会階層に関する問題について、理論的・経験的に研究を行っています。具体的には、高齢期における生活格差をめぐる問題について、過去の最長職や家族関係、社会関係資本、ライフスタイルや意識等に注目し、研究を進めています。近年は、関東近郊の階層構造に関するプロジェクトに参加し、都市と階層構造についても研究関心を深めています。

土屋淳二

集合行動論、社会学説史（知識社会学を含む）、科学社会学（感性社会学を含む）を専門領域とする。第一の集合行動論の分野では、群集／大衆社会論、社会運動論、ポピュリズム研究、災害時行動論（流言飛語、防災ボランティア行動論、災害情報論）、流行研究やファッション論など集合現象の文化過程論を論ずる。第二の社会学説史では、主に明治大正期の黎明期日本社会学における知識人の保守的イデオロギー分析、第三の科学社会学ではロボット社会論、高度科学技術社会論などを展開する。

西城戸 誠

専門は、環境社会学、地域社会学、社会運動研究です。最近では、再生可能エネルギーに関わるアクティビズム、エネルギー事業と地域社会の受容性に関して国内外の事例研究を行っています。また、東日本大震災と原発事故後は、津波被災地の地域再生、原発避難者に対する支援に関する実践的な研究も行ってきました。また、炭鉱における女性の活動に関する実証的な研究や、島嶼の生業の持続可能性に関する研究も行っています。

山田 真茂留

専門分野は集団・組織論、理論社会学、宗教社会学。これらをもとにして、集合的アイデンティティ研究、組織文化研究、価値意識研究、学術出版業界研究などを展開している。

★2025 年度社会学コース設置科目講義要項★

Web シラバス

<https://www.wsl.waseda.jp/syllabus/JAA101.php?pLng=jp>

プルダウン
「学部」→「文研」を選択

プルダウン
「科目管理主体」→
「34 124 社会学コース」を選択

キーワード		*キーワードにはコース・コードを指定して検索することができます
分野コード	大分類を絞ってください 	■早稲田大学分野コード表 ■コース・ナビゲーション制度について
レベル		
科目名		*科目名の一部を指定しての検索が可能です(※前後方一致) 例:経済
教員名		*教員名の一部を指定しての検索が可能です(※前後方一致)
学期		
曜日		*無:集中講義、オンデマンド授業のような実施曜日を指定できない科目を検索 *空白:実施曜日にかかわらず科目を検索
時限		
授業で使用する言語		
オープン科目	☐	*全学オープン科目とは、専攻分野にとらわれず、どの学部に所属する学生でも履修できる全学共通の科目です
学部	文研	
科目管理主体	34 124 社会学コース	
検索 検索条件クリア 過年度シラバス検索へ		

2. 文学研究科社会学コース 修士論文題目一覧（2010-2024）

年度	論文題目	指導教員	副査	副査
2024	現代日本における脱毛表象の変遷	草柳 千早	池田 祥英	山田 真茂留
	石炭産業における労働者の反復的移動と定着	嶋崎 尚子	草柳 千早	西城戸 誠
	中国におけるディンクスの出現と受容	嶋崎 尚子	岡本 智周	津田 好美
	サードプレイスにみる「弱いつながり」の実態	石田 光規	大久保 孝治	西城戸 誠
	日本において生殖の自己決定の手段はいかに議論されるのか	草柳 千早	岡本 智周	田辺 俊介
2023	社会保険庁の創設および解体の経緯にみる社会保障の理念の変容	岡本 智周	津田 好美	西城戸 誠
	差別を正当化する「公益」のレトリック	岡本 智周	津田 好美	石田 光規
	習近平「新時代」の中国像に関する言説分析	岡本 智周	田辺 俊介	樽本 英樹
	大学応援団における権威主義と民主主義の相克	岡本 智周	嶋崎 尚子	土屋 淳二
	多文化共生の意味内容をめぐるポリティクス	岡本 智周	池田 祥英	田辺 俊介
	「負の記憶」をいかに継承するか	西城戸 誠	土屋 淳二	岡本 智周
2022	寛容の虚実	田辺 俊介	岡本 智周	津田 好美
	中小企業における LGBT に関する制度策定の機制	岡本 智周	嶋崎 尚子	津田 好美
	マルセル・モースにおける「人間」の両義性	草柳 千早	池田 祥英	御子柴 善之
	アイドルとファンの関係に関する社会学的分析	山田 真茂留	田辺 俊介	草柳 千早
	「声」をいかに聞き取るか	草柳 千早	山田 真茂留	西城戸 誠
2021	現代中国における農民工の都市移住に関する考察	津田 好美	樽本 英樹	嶋崎 尚子
	月経を病因とした女性の精神疾患の歴史社会学	草柳 千早	土屋 淳二	竹中 均
	現代女性はなぜ脇毛を披露するのか	草柳 千早	池田 祥英	嶋崎 尚子
2020	「ひきこもり」「ニート」概念を活用した活動の様相	草柳 千早	大久保 孝治	竹中 均
	市場経済体制における「成人期への移行」の出現	嶋崎 尚子	山田 真茂留	津田 好美
	写真を中心とした自己呈示	山田 真茂留	大久保 孝治	岡本 智周
	生物学化する障害の社会構築性	山田 真茂留	岡部 耕典	竹中 均
	デジタルゲームにみるジェンダー構造	嶋崎 尚子	津田 好美	山田 真茂留
	集合的記憶論再考	草柳 千早	池田 祥英	竹中 均
	中国家族の行方	津田 好美	大久保 孝治	嶋崎 尚子
2019	文化としての＜コミュニケーション＞	竹中 均	大久保 孝治	草柳 千早
	現代日本のフェミニズムにおける包摂と排除	山田 真茂留	草柳 千早	津田 好美
	大学の権威と数的秩序	竹中 均	大久保 孝治	岡本 智周
	「自己肯定感を高める」の社会学的再考	草柳 千早	竹中 均	大久保 孝治
	組織からの逃走の困難性	草柳 千早	山田 真茂留	竹中 均
	文芸を介した連帯	竹中 均	山田 真茂留	土屋 淳二
2018	中国における若者文化の対抗性	山田 真茂留	竹中 均	津田 好美
	中国都市部における高学歴高収入の未婚女性の意識に関する研究	大久保 孝治	草柳 千早	嶋崎 尚子
	ハッ場ダム建設地域における住民運動と生活再建の研究	浦野 正樹	嶋崎 尚子	草柳 千早
	道徳とコミュニケーション	那須 壽	草柳 千早	竹中 均
2017	責任と現実	那須 壽	竹中 均	草柳 千早
	合理的選択理論からする「個人化論」再考	和田 修一	浦野 正樹	嶋崎 尚子
	日本の若者が抱く排外主義の規定要因分析	田辺 俊介	嶋崎 尚子	津田 好美
	中国における「一人っ子」家庭の家族関係をめぐる意識の変化	津田 好美	嶋崎 尚子	大久保 孝治
2016	「心の専門家」の制度的展開	山田 真茂留	木村 好美	那須 壽
	「信頼社会」構想の再検討とその可能性の探求	草柳 千早	那須 壽	竹中 均
	日中国際結婚に見る中国人女性の就労と子育ての葛藤	大久保 孝治	嶋崎 尚子	山田 真茂留
	アクティブラーニングによる学習成果の規定要因	木村 好美	和田 修一	田辺 俊介
	中国北京市における「初代一人っ子親世代」の扶養・介護問題に関する考察	嶋崎 尚子	山田 真茂留	和田 修一

2015	女性同性愛者はどのような「差別」を経験しているのか	草柳 千早	大久保 孝治	岡部 耕典
	「望ましい人材」の変遷と現代社会	山田 真茂留	草柳 千早	竹中 均
	裁判員裁判における「市民感覚の反映」	草柳 千早	嶋崎 尚子	山田 真茂留
	社会的世界の構成と匿名性	那須 壽	竹中 均	草柳 千早
	現代の教師が有する子ども観についての社会学的分析	和田 修一	岡本 智周	竹中 均
2014	地域社会の変容と成人期への移行の世代間比較	嶋崎 尚子	浦野 正樹	沖 清豪
	広告業界における自律の論理	木村 好美	山田 真茂留	田辺 俊介
	炭鉱機械化の促進因としての労働者エートス	浦野 正樹	嶋崎 尚子	和田 修一
	一人称の感情社会学の展開	竹中 均	大久保 孝治	土屋 淳二
	精神医学における「人々の作り上げ」	草柳 千早	土屋 淳二	竹中 均
	日本と韓国における外国人労働者受入れ政策の比較分析	和田 修一	坂田 正顕	嶋崎 尚子
2013	地域密着型労働組合の社会学的研究	和田 修一	浦野 正樹	中村 圭介
	言えないから言わないへ	大久保 孝治	長田 攻一	草柳 千早
	社会調査の比較社会学	那須 壽	嶋崎 尚子	池岡 義孝
	中国における教育の不平等	山田 真茂留	沖 清豪	竹中 均
	イギリスにおける福祉機能の組み換えと下層労働者層の流入	浦野 正樹	長田 攻一	嶋崎 尚子
2012	「同性愛差別」再考	草柳 千早	長田 攻一	山田 真茂留
	個人と社会の相互作用の回復	森 元孝	坂田 正顕	嶋崎 尚子
	クレイム申し立てのカルチュラル・スタディーズ	草柳 千早	坂田 正顕	岡部 耕典
2011	過疎地域における地域産業の復興と地域社会の持続可能性	浦野 正樹	長田 攻一	坂田 正顕
	タルコット・パーソンズと普遍主義の射程	山田 真茂留	長田 攻一	坂田 正顕
	他者と共にある世界の構成について	森 元孝	竹中 均	那須 壽
	歪められた身体	土屋 淳二	草柳 千早	坂田 正顕
2010	E.ゴフマンの儀礼論における射程と視座	長田 攻一	草柳 千早	那須 壽
	地域活動の多様化と文化的創造性	浦野 正樹	長田 攻一	坂田 正顕
	現代中国における権威主義と腐敗	坂田 正顕	長田 攻一	浦野 正樹
	若手芸術家の＜生産＞	草柳 千早	浦野 正樹	坂田 正顕

※2009 年度以前は社会学コース web ページを参照のこと。
<https://dpt-sociology.w.waseda.jp/thesistitles/>

専門社会調査士資格について

● 社会調査士・専門社会調査士とは

「社会調査の知識や技術を用いて、世論や市場動向、社会事象等をとらえることのできる能力を有する『調査の専門家』のこと」（社会調査協会 HP より）

- ・社会調査士資格は、社会調査協会（日本教育社会学会、日本行動計量学会、日本社会学会が中心となって 2003 年設立）が 2004 年から認定している資格です。「社会調査士」と「専門社会調査士」の 2 種類があります。国家資格ではありません。

一般社団法人 社会調査協会 <http://jasr.or.jp/>

- ・「社会調査士」は、社会調査協会の標準カリキュラムに対応する 7 科目（A～G、E・F は選択）のうち 6 科目を履修し、単位を修得することで取得が可能になります。
- ・「専門社会調査士」の申請条件は、以下のとおりです。

- ① **社会調査士資格**を有し、
- ② 大学院で社会調査協会の**標準カリキュラム対応 3 科目（H・I・J 科目）を履修・単位修得**し、
- ③ **社会調査の結果を用いた研究論文（修士論文を含む）を執筆**し、
- ④ **修士課程を修了**すること。

※大学院入学時点で「社会調査士」資格がなくとも「同時申請」によって「専門社会調査士」を取得することが可能です。

- ・早稲田大学大学院文学研究科社会学コースでは、標準カリキュラム対応 3 科目である「調査企画・設計特論」（H 科目）・「多変量解析特論」（I 科目）・「質的調査法特論」（J 科目）を循環的に開講しています。

● 専門社会調査士 標準カリキュラム

【 H 】 調査企画・設計に関する演習（実習）科目

社会調査を実践的に企画・設計し、実施し、分析・集計をおこなうための実践的な知識と能力を習得する科目。調査方法論、調査倫理を踏まえ、調査方法の決定、調査企画と設計、仮説構成、調査票の作成、サンプリングないし対象者・フィールドの選定、実査、調査データの整理（エディティング、コーディング、データクリーニング、フィールドノート作成、コードブック作成）、比較的簡単な量的分析とグラフ作成、質的な分析、以上に基づく報告ペーパーの作成などに関する実践的な授業科目。（100 分×14 週）

【 I 】 多変量解析に関する演習（実習）科目

数理統計学の基礎を踏まえながら、多変量解析（重回帰分析、パス解析、分散分析、共分散分析、ログニニア分析、ロジット分析、主成分分析、因子分析、多次元尺度法、クラスター分析、数量化理論、生存時間分析、共分散構造分析など）に共通する計量モデルを用いた分析法を基本的に理解し、それらのうちのいくつかについては、コンピュータを用いて実際に使用することのできる能力を習得する科目。（100 分×14 週）

【 J 】 質的調査法に関する演習（実習）科目

新聞・雑誌記事、資料文書、映像、放送、音楽などの質的データの分析法（内容分析等）を習得するとともに、さまざまな質的調査法（聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、フィールドワーク、インタビュー、ライフヒストリー分析、会話分析など）に関する基本的理解を踏まえながら、そのあるものについての実践的な能力を習得する科目。（100 分×14 週）